

# U R III 期の行政経済文書における 日付表現の書式変化について

峯            正   志

## 1 はじめに

世界最古の都市文明を築いたシュメール人は、現在の我々と同様の複雑な社会経済組織を持っていた。その運営に用いられたおびただしい量の行政経済文書が、現在我々の手元に残されている。それによって、4000年以上前の彼らの日常生活を我々は窺うことができる。

さて、シュメールの行政経済文書には、多くの場合年月日が記されている。筆者は其中で、特に「日」を示す表現、すなわち「日付表現」に注意を払ってきた。そして日付表現に関わる、これまで見逃されていたいくつかの事実を指摘してきた。それは、日付表現にはいくつかの異なった類型があるが、それらは、一見自由変異のように見えながら、実は、文書の書かれた年代によって分布が異なることがあるという事実であった。筆者は、峯(1990)および峯(印刷中)において、それぞれニップールおよびドレヘムにおける経済文書の日付表現について、そのことを指摘した。本稿では、そのような書式の変化が、どのような性質のものであるかということについて、考察する。

## 2 日付表現の書式変化

まず、日付表現の書式変化がどのようなものであったのかを簡単に述べたい。

シュメール語における日付表現には次のようなものがある。

i)  $u_4-X \text{ zal-la}^{1)}$

ii)  $u_4-X \text{ ba-zal}$  (/ba-ta-zal, ba-ra-zal)<sup>2)</sup>

iii)  $u_4-X\text{-kam}^{3)}$

これ以外の日付表現は在証例が少ない。

さて、ニップールでは次の書式変化が起こった。

i)  $u_4-X \text{ zal-la} \rightarrow$  ii)  $u_4-X \text{ ba-zal}$

また、ドレヘムでは次の書式変化が起こった。

ii)  $u_4-X \text{ ba-zal} \rightarrow$  iii)  $u_4-X\text{-kam}$

おおまかに言って、この書式変化は、どちらにおいてもアマルシンの治世に起こったも

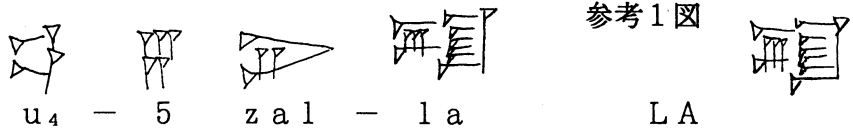
のである<sup>4)</sup>。

では、このような変化は何故起こったのであろうか。まず、変化の見られる期間の短さや、全く異なった文法形式を用いていること、などから、文法の歴史的変化を反映しているとは考えがたい。従って、この変化は文法的変化を反映したものではなく、別な理由に基づく書式変化であると考えたほうが妥当であろう。では、どうしてこのような書式変化が起こったのか。次の章で、シュメールの楔形文字で書かれた日付表現を実際に観察してその理由を考えてみたい。

### 3 楔形文字で表現された日付表現

では、それぞれの表現の楔形文字による表記を見てみよう。

#### i) u<sub>4</sub>-5 zal-la 「5日過ぎ」



#### ii) u<sub>4</sub>-5 ba-zal 「5日過ぎた」



#### iii) u<sub>4</sub>-5-kam 「第5日」



i) と ii) の表記を比較してみてもまず気付くのは、zal-la に使われた LA (参考1図) の文字の複雑さであろう。それに比べて、ba-zal の BA (参考2図) ) はいかにもすっきりしている。明らかに字画が減少している。同様に ii) から iii) への変化にも、字画の現象が見られる。後者の場合、ここでの表記だけを見ると、ii) も iii) も字画にそれほど違いがないように見えるが、実はドレヘムでは ii) を用いた場合、itu u<sub>4</sub>-X ba-zal のように、必ず itu 「(年月日の) 月」 (参考3図) を最初に書かなければならない。しかし iii) の場合は u<sub>4</sub>-X-kam だけでよいのである。itu を書く手間が全く省けるわけである<sup>5)</sup>。

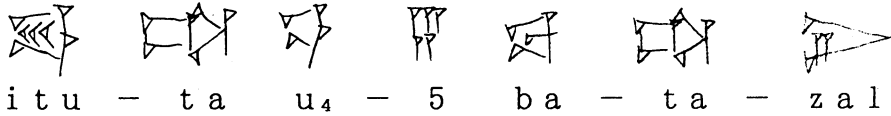
これらの表記を観察して、筆者は次のような仮説を立てた。すなわち、「ニップールで起きた書式変化もドレヘムで起きた書式変化も、ともに本質は表記法の簡素化である。」

次の章では、これを証拠付けられると思われるような言語事実を指摘する。

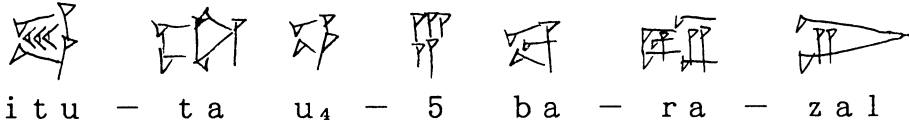
#### 4 u<sub>4</sub>-X ba-zal 型における接中辞の年代的分布

本稿の第2章で少し触れたが、ii) u<sub>4</sub>-X ba-zal 型にはいくつかの変異型が存在する。すなわち、接中辞 -ta- を伴った形、および接中辞 -ra- を伴った形である<sup>6)</sup>。これらの動詞接中辞は、文中における奪格名詞に呼応して現われる。従って、ba-ra(/ta)-zalの場合には、奪格名詞 itu-ta が先行する。ドレヘムにおける実例を下に示す。

##### ii-1) itu-ta u<sub>4</sub>-5 ba-ta-zal

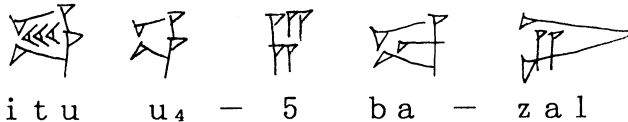


##### ii-2) itu-ta u<sub>4</sub>-5 ba-ra-zal



一方、同じ奪格名詞でも奪格語尾 -ta が現われない場合は ba-zal となる<sup>7)</sup>。

##### ii-3) itu u<sub>4</sub>-5 ba-zal



さて、筆者の調査では、これらの変異形は年代的に異なった分布を示す<sup>8)</sup>。もし前章で立てた筆者の仮説が誤ってないとすると、表記の複雑な ba-ra(/ta)-zal 型は ba-zal 型より古いはずである。従って、ba-ra(/ta)-zal 型から ba-zal 型に推移するはずで、その逆ではない。では、実際にはどうであろうか。下に両者の分布図を示す<sup>9)</sup>。

	itu-ta ba-ra(/ta)-zal	itu u <sub>4</sub> -X ba-zal
§38	S57;	
§39	S133;T181;	
§40	T182;T183;T184;363;486;N952;	

§41	<u>T186</u> ;T36;T52;T73;	
§42	<u>T188</u> <sup>10)</sup> ; <u>T187</u> ;S58; <u>T37</u> ; <u>T38</u> ; <u>T39</u> ; N541	
§43	M51;	S136;S137
§44	7;T42;T43;T53;M324;	S138;S139;S140;S10;N83;N120;
§45	S60;S61; <u>N7</u> ;	S141;T198;496;T74;T75;
§46	T189;T190;	15;467;502;S142;T200;T231;10;14;M323;M333 N508;
§47	337;T193;T194;21;T48;N881;	323;T224;T191;T202;23;M6;M189;M310;M329; N292;
§48		
AS1		33;M194;M338;N787;
AS2	<u>N953</u> ;	S143;T232;T233;M110;M328;M360;N312;
AS3		70;423;529;S144;S145;
AS4		74;S149;S154;T267;M80;N209;N13;
AS5		S156;T245;114;M199;N657;
AS6		S158;T249;T250;T251;N35;
AS7		138;430;S159;S160;T253;T254;M244;N52;
AS8		164;165;170;173;178;402;477;547;S162;S165

		T255;M365;
AS9		199;382;S169;S170;S171;T257;T260;T261;M50
§S1	M193 <sup>1 1)</sup> ;	213;217;218;435;436;M216;N559;E76;
§S2		221;442;551;559;M297;M352;
§S3		
§S4		567;571;M282;N152;
§S5		245;569;S174;
§S6		
§S7		E78 <sup>1 2)</sup> ;
§S8		
§S9		
IS1		M245;
IS2		
IS3		

結果は筆者の推測どおりになっている。

## 5 結論

以上述べてきたことをまとめてみよう。

筆者は、峯（1990）および峯（印刷中）において、ニップールおよびドレヘム出土の行政経済文書に日付の書式変化が見られることを指摘した。本稿では、楔形文字による表記の比較により、それらの変化にはともに字画の減少が見られることを指摘した。そしてそ

れに基づいて、「これらの書式変化の本質は書式の簡素化である。」という仮説を立て、それを証拠付けるようなもう一つの言語現象を指摘した。

しかしながら、これだけの証拠では、本当に書式の簡素化のためにこれらの変化が生じたのかどうか断言することは難しいと思われる。他の理由で生じた変化がたまたま両者とも字面の減少を伴うものであった可能性も否定できないからである。本稿では、ニップールやドレームで起きた日付の書式変化が、「書式の簡素化」に基づいた変化である可能性が高いとのみ指摘するに止めておきたい。

## 註

- 1)  $u_4$  は「日」の意。X は数字を表す。zal-la は動詞 zal「(日が) 過ぎる」に、接尾辞 -a が付いた形。「X日過ぎ」という表現である。これは、シュルギやアマルシンの時代のニップール出土の行政経済文書に特徴的に見られる表現である。峯 (1990) 参照。
- 2) 動詞 zal「(日が) 過ぎる」に、接頭辞 ba- が付いた形。ba-ta-zal は、奪格名詞に呼応する接中辞 -ta- を伴った形。ba-ra-zal は、その異形。本稿の第4章で詳述する
- 3)  $u_4$ -X「X日」に、序数詞を作る接尾辞 -kam を接辞したもの。「第X日」という表現である。
- 4) 詳しくは、峯 (1990) および峯 (印刷中) を参照のこと。
- 5) ニップールの場合はドレームと違い、itu は書かなかった。もっと正確に言うと、必ず前行に月名を明示していたので、同じ行にもう一度 itu を書く必要がなかったのである。従って、 $u_4$ -X ba-zal と  $u_4$ -X-kam の間に字面の違いはあまりない。ニップールで ba-zal 型から  $u_4$ -X-kam 型への変化がなかった (少なくともイビシンの治世の初期までは) のは、このことも影響しているかもしれない。
- 6) これらの要素は、動詞語根の内部に現われるわけではないので、正確には動詞接中辞とは言いがたいが、シュメール語学では infix と呼ばれることが多い。接中辞 -ra- は、接中辞 -ta- が音韻変化したものと思われる。
- 7) この逆は成り立たない。すなわち、ba-zal となっても、奪格語尾 -ta が現われないわけではない。例は少ないが、例えば T191 や、Owen (1982) の 914 がある。Owen (1982) の 914 は、峯 (1990) ではニップールの泥章として扱っているが、実は筆者の誤りで、他の特徴を見ても明らかにドレーム出土の泥章である。
- 8) 異なった分布を示すのは、ドレームの用例だけである。ニップールの用例に関してはアマルシンの治世から ba-zal 型に移行するためか、ba- $\emptyset$ -zal 型しか見られない。
- 9) 本稿の図表に用いた略号は次の通り：

š = シュルギ AS = アマルシン šS = シュシン IS = イビシン

表中の数字は泥章を示している。数字だけのものは Keiser (1971)、E のついたものは Snell (1987)、M のついたものは Owen (1991)、N のついたものは Sigrist (1984)、S のついたものは Kang (1972)、T のついたものは Archi & Pomponio (1990) に現われた泥章である。「itu-ta u<sub>4</sub>-X ba-ra-zal」の欄中、下線を引いたものは ba-ra-zal でなく、ba-ta-zal であることを示す。なお、表中の数字は必ずしも順番に並んでいないことをお断わりしておく。

- 1 0) この例には、ba-ra-zal と ba-ta-zal がともに用いられている。
- 1 1) この M193 の例は明白な例外である。しかしこの泥章は、シュシン1年のものであるにも関わらず、「～から支出した。」の表現に ki~ta ba-zi でなく zi-ga ki~を用いており、全体的に古い表現を用いている。
- 1 2) 峯 (印刷中) の調査では、シュシン6年以後には ba-zal 型の例は見られないのだが、このシュシン7年の例と、イビシン1年の M245 の2例に関しては例外である。しかし、M245 の例は通常のドレヘム文書とは異なっている。むしろニップールの書式に近い。註5にも書いたが、ニップールでは「itu- (月名) u<sub>4</sub>-X zal-la」、または「itu- (月名) u<sub>4</sub>-X ba-zal」のように、月名が先行する。M245 も itu-ezem-mah u<sub>4</sub>-21 ba-zal のように月名が先行している。これに対してドレヘムでは、「日」、「月」の順序で現われる。

E78 の例は一応、明白な例外と認められる。しかし、Snell (1987) で発表された泥章は出土地の確認をする必要があるかもしれない。例えば、E87 はドレヘム出土とされているが、itu-še-gur<sub>10</sub>-ku<sub>5</sub> u<sub>4</sub>-15 zal-la のように、明らかにニップールの書式をとっている。

## 引用文献

- Archi, A. & Pomponio, F. (1990) *Testi Cuneiformi Neo-Sumerici da Dreher. No. 0001-0412*. Cisalpino Istituto Editoriale Universitario. Milano.
- Kang, S. T. (1972) *Sumerian Economic Texts from the Dreher Archive*. Sumerian and Akkadian Cuneiform Texts in the Collection of the World Heritage Museum of the University of Illinois Vol. I. University of Illinois Press. Urbana, Chicago, London.
- Keiser, C. L. (1971) *Neo-Sumerian Account Texts from Dreher*. Yale University. New Haven and London.
- 峯 正志 (1990) 「URIII期ニップール出土の行政経済文書における日付表現について」『ニダバ』 No. 19, p. 53~60
- \_\_\_\_\_ (印刷中) 「URIII期ドレヘム出土の行政経済文書における日付表現について」

- Owen, D. I. (1982) *Neo-Sumerian Archival Texts. Primarily from Nippur in the University Museum, the Oriental Institute and Iraq Museum.* Eisenbrauns.
- \_\_\_\_\_ (1991) *Neo-Sumerian Texts from American Collections.* Materiali per il Vocabolario Neosumerico Vol.XV. Multigrafica Editrice. Roma.
- Sigrist, M. (1984) *Neo-Sumerian Account Texts in the Horn Archaeological Museum.* Institute of Archaeology Publications Assyriological Series, Vol.1 (Andrews University Cuneiform Texts, Vol.1) Andrews University Press. Berrien Springs, Michigan
- Snell, D. C. (1987) *The Ur III Tablets in the Emory University Museum.* *Acta Sumerologica* No.9. p.203~275. Hiroshima.